

# 日本記者クラブ会報

本年度のクラブ賞

## 松本(朝日)、清水(東京)の両記者に

4月19日開催の理事会は、朝比奈豊選考委員長の答申を受け、07年度日本記者クラブ賞を、朝日新聞の松本仁一編集委員と中日新聞東京本社(東京新聞)の清水美和論説委員に贈ることを決定した。

5月24日の総会(法人代表と役員らが出席)で贈賞式が行われ、当日、午後5時30分からの会員懇親会で、滝鼻理事長が会員のみなさんにお二人を紹介し、受賞をお祝いすることになる。



### 春風駘蕩のベテラン

松本さん(64)はアフリカ・中東問題で多くの優れた

実績を持つベテラン記者。今回は、04年から05年にかけて1部、2部、3部と130回に及んだ長期企画「カラシニコフ」での取材力、表現力、構想力などが高く評価された。連載は、カラシニコフ本人、元少

女兵、ゲリラに身を投じた少年へのインタビューなどを軸に、平明な筆で再構成されたルポで、小型武器拡散の実態だけにとどまらず、国家とは何か、その義務と責任とは何かをあらためて人々に問いかけた。企画のきっかけは、夕刊に載ったAPの次の記事だった。「AK47の設計者カラシニコフ氏(83)が設計した銃の展示会がドイツの博物館で開かれている。同氏はAK47を『自慢の作』としており、悪用された話を耳にするたびに胸を痛めている」(02・8・5付朝日新聞)。

第447号  
2007年  
(平成19年)  
5月10日発行

〒100-0001  
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
日本プレスセンタービル  
◎社団法人 日本記者クラブ  
http://www.jnpc.or.jp

本人に会えたら、自動小銃AK47(通称カラシニコフ)を切り口にして「国家と武力」の問題を描けるかもしれないと思ったという。ロシアへ飛んでのインタビューはその年の11月と翌年8月の2回。

一般の欧米記者のようにストレートに核心部分を問いつめていくのではなく、生い立ちなどの周辺取材から始めた。それが相手の心を開いたようだ。

築地のラウンジで、そんな話を聞きながら、小柄な松本さんにふくよかな春風を感じた。

### 「中国」相手の不撓不屈

清水さん(53)は、現場を踏んだ取材と丹念な資料収集に基づき「中国農民の反乱」「中国「新富人」支配」



「中国が「反日」を捨てて日」などの著作と紙面で、先見性をもって「中国」を

報道・論評したとして評価された。近所なので、クラブの食堂で話を聞いた。大学4年のとき(1976年)、日本学生訪中団の副団長として中国へ。破格の厚遇で各地で熱烈歓迎され、3週間滞在して帰国したら、空港に記者団が待ち構えていた。第一次天安門事件の取材だった。

4月5日、滞在した北京飯店で盛大に歓送宴が催された。翌日「飛行機が早くなった」と起こされ、まだ暗い中を空港へはこばれ、中国民航機に乗り込んだ。宴の夜、目と鼻の先の天安門では四人組に反対する示威行動が激しい弾圧にあつて、騒乱状態だったのだ。全く気づかなかった。

入社して10年あまり中国から距離をおいた。そのあと社の留学制度で再び北京へ。以後は中国一本。タフな中国がタフな記者をつくった。

今度の温家宝訪日にも点数が辛い。紙面でこんなことも書いた。記者会見などを行わず「想定外」の事態を避けているかに見えるのは残念だ。得意即妙の回答から、垣間見える素顔や肉声は百の演説にもまして首相への親しみを増す――と。賛成。

以上はイタめし風にいえば第一のお皿。メインディッシュの「受賞者の弁」は6月号に掲載します。

(専務理事 岩崎 玄道)

スラユット・チュラノン タイ首相

4・3(火) 昼食会 司会 宮田謙一委員  
 通訳 池田薫 出席 112人



▼伝わった民政移管への気迫

「伝説」に彩られた人物である。タイ国軍の高級将校だった父親は共産主義に傾倒して家族を捨て、ゲリラに身を投じた。スラユット氏6歳の時だった。

長じて自身も軍人となり、共産ゲリラの掃討作戦にも従事した。銃撃戦の末、血まみれの死体をおおむけにする、敵兵は父親だった。そんな悪夢を何度も見た、と米誌に語っている。逆賊の子は、特殊戦司令官、陸軍司令官、国軍最高司令官まで上り詰めていく。

1992年に起きた民主化弾圧事件では、指揮下の部隊がデモ隊に発砲。多数の死傷者を出したことを悔やみ、「軍は二度と政治に関与して

はならない」を信条としてきた。退役後は一時、仏門に入った。

筆者もバンコク駐在中、スラユット氏の篤実、清廉な人柄を何度か耳にした。

そうした国民の信頼があつてのこととはいえ、タクシン前首相を追放したクーデター後、暫定首相として「政治関与」の先頭にたつざるを得ない現状は、何とも皮肉だ。スラユット首相は会見で、タクシン

前首相の権力乱用、腐敗ぶりを指弾しながら、「軍の介入は公益になつたものだった」と釈明に努めた。「暫定政権は軍事政権ではない」とも言い切った。

前首相の汚職疑惑捜査は4月に終える。憲法改正の是非を問う国民投票を9月末までに行う。12月16日から23日に総選挙を実施する。スラユット首相は会見で、民政移管に向けたロードマップについて気迫を込めて説明した。

経済政策の混乱やタクシン派の巻き返しといった逆境をはねのけて、民主再生の立役者という新たな伝説を紡ぎ出せるのか。正念場である。

読売新聞論説委員 大江 志伸

菅 義偉 総務相

4・9(月) 記者会見 司会 田崎史郎委員  
 出席 142人

▼今後も注目集める発言と行動

昨年9月の就任以来、新たな地方分権改革推進法案を短期間で取りまとめるなど行動力を発揮し、安倍内閣で存在感が急上昇。放送法に基づき、短波ラジオ国際放送で北朝鮮による拉致問題を重点的に扱うようNHKに命じるなど、通信・放送分野で物議を醸している。この日も地方分権推進や道州制実現への意欲とともに、放送業界への強硬姿勢が目立ち、今後も菅氏の発言や行動を注視する必要があることを印象付けた。

関西テレビの情報番組「発掘!あるある大事典II」によるデータ捏造を受け、総務省は放送法改正案に、捏造番組を流した放送局への新たな行政処分案を盛り込んだ。菅氏は「放送事業者の自浄努力は期待しにくいのか」と思った。あまりに国民の信頼を裏切りすぎている」と厳しく非難。問題発覚後の日本民間放送連盟の対応も「後手に回った」と批判し、



処分新設の正当性を主張した。

同時に「政治介入はまったく考えていない。処分は抜かずの宝刀だ」と語り、BPO(放送倫理・番組向上機構)の再発防止策が機能している間は処分発動を凍結すると明言。発動は放送局が捏造を認めた場合に限ると強調した。しかし、法案では発動要件があまりに点などが問題視されている。放送局が信頼回復に向け、捏造撲滅に努めるとともに、政府の動きを監視することの重要性もあらためて認識させられた。

北海道夕張市の財政再建団体移行を受け、自治体財政の早期健全化を促進する法案を当初予定より前倒しして今国会に提出するなど、地方自治関連の分野では菅氏の素早い対応が目立つ。「地方分権をしっかりと

一歩ずつ、着実に進めていきたい」との決意を示しており、国と地方の役割分担見直しが大胆に進むことを期待したい。

時事通信経済部

藤原 秀行

## ヌーリー・アル・マリキ イラク首相

4・10(火) 記者会見 司会 金平茂紀理事  
通訳 アフマド・シヤム 池田薫 出席 171人

### ▼重い課題を背負って

マリキ首相はイラクで試練の日々を送っている。首都バグダッドでは底無しの治安悪化が続き、ブッシュ米大統領が威信をかけて発表した米軍増派、米軍・イラク治安部隊による大規模な掃討作戦の成否が、今後の情勢を左右する。

そんな中での初来日。イラク戦争を支持した「有志連合」の各国部隊が次々撤退する中、日米同盟重視の立場から航空自衛隊の活動延長を決め、巨額の円借款を表明した日本が、イラクにとり最大の友好国の一つであることは疑いない。

会見も「日本は常にイラクの味方だ」などと日本への賛辞と謝意にあふれた。「マスコミが悪いニュースばかり伝えるのも仕方ない面がある」「どんな質問も躊躇する必要はない」などと余裕を見せたのも日本訪問中の気安さからか。



目立ったのはイラクの主権、主体性を強調した発言だ。米軍を中核とする多国籍軍駐留について「イラク政府の承認の下で行われ、国連安保理決議に基づいている」と指摘。米軍撤退については「日程表は必要ない」「イラク側が治安維持に責任を持てるようになることが条件」とし、米軍撤退を決めるのはイラク人だとの考えを示した。

が浮き彫りになった。

会見はフセイン政権崩壊から4年目の翌日。独裁者は去ったが、イラク人は今も恐怖の中で暮らしている。国民に安心と安全を与え、一日も早く戦禍からの復興を果たすこと。マリキ首相の背負う課題は重い。共同通信外信部 島崎 淳

## 都甲 岳洋 元駐ロシア大使

4・13(金) 研究会「ロシア」① 司会 中井康朗委員 出席 89人

### ▼ポスト・プーチンにも言及



久しぶりに「ロシア」研究会が始まった。1991年のソ連崩壊前後には「ソ連・ロシア」

研究会が盛んに開かれたものだが、その後、途絶えていた。マスコミが「普通の国」になりつつあるロシアに関心を失ったからだろう。

しかし、今、豊富な天然資源を武器に、欧米の警戒感をよそに大国を目指してまっしぐらのプーチン政権下のロシアに、マスコミは再び注目を始めた。やはり、ロシアは「異質な国」でなければおもしろくないということか。

研究会のトップバッターは、エリツイン時代の96年から99年までロシア大使を務めた都甲岳洋さん。まず、ソ連の崩壊から新生ロシアへの移行、そして最近のプーチン政権の強権化まで、大学の講義のように総括的に説明してくれた。

その上でプーチン政権の強権化の背景には、かつての超大国ソ連への憧憬があること、さらに、その憧憬の裏には西側を潜在的脅威と感じながらも理想郷とも考える国民の複雑な感情があると分析された。ロシア人の心理に精通している都甲さんらしい見方である。

1時間20分の「講義」の後の質疑応答では、ポスト・プーチン問題が面白かった。世間ではメドベージェフ、イワノフの両第一副首相の名が取沙汰されているが、都甲さんは、プーチンの隠し玉として先日来日したヤクーニン・ロシア鉄道社長の名を挙げたのだ。

その根拠に、現在、三井物産戦略研究所の特別顧問である都甲さんが出席された国際フォーラムにヤクーニンが送り込まれたことを挙げ、目的は国際的な人脈作りだろうと推測された。

ロシアとの極太のパイプを持つ都甲さんから始まったシリーズ研究会で、今後のロシアへの関心がますます高まった。

NHK解説委員

田中 和夫

中西 進 奈良県立万葉文化館館長

4・16 (月) 研究会「古代日本語と外来文化」 司会 井田由美委員 出席 16人

▼古代日本の国家形成と日本語

大学の教室で聴くような地味なテーマなのに出席者は大勢だ。なぜだろう。日本語が歴史的に大きな変わりの目にあると見て関心が高まっているためだろう。情報機器の発達・普及がもたらすインパクトや今日の言葉の乱れが背景にある。

人は曲がり角に立つ時、流れをさかのぼって源流を見極めようとする。いわばDNAの検証である。中西氏の日本語探求は縄文時代にまでさかのぼる。狩猟と採集に生きたこの時代、われわれの祖先が発した言葉に、ネやチなどの一音節語がある。後に漢字で表し、ネは根や嶺、チは血や乳等に分化したものの、前者には共通して「堅牢で不動のもの」、後者には「ふしぎな活力」に対する感嘆の響きが込められた。縄文人の息遣いが残ったのだ。



縄文人の言葉  
現代日本語の奥底に潜むとの見方  
には反論もある。特になぜか近年、

「消滅する言語」の研究が盛んで、そのスジから、有史以前の日本列島で使われた言葉でいま生き残っているものは一つもない—との説が唱えられている。「とんでもない」と中西氏は言う。「すべて消滅しただって？一語ずつ証明し尽くされない限り、それは学説とは言えない」。この断固たる言辭には説得力があった。

以上の話は中西レクチャーのいわば序論に過ぎない。本論は縄文のあとと有史時代に入ってから、稲作の導入、漢字の輸入、国家の形成、文化の創建が進む過程で日本語が姿を整え洗練されていく、その全体の変化の絡みを説く下りである。その様相はドラマに満ち、エキサイティングにも響いた。例えば「死ぬ」は「撓う(しなう)」に通じる、そしてそれは日本語のしなやかさを物語るものだ、といった説明、素敵である。

学の魅力の源泉もここにあり、と。日本経済新聞出身 阪口 昭

船橋 洋一 朝日新聞コラムニスト

4・23 (月) 著者と語る「サ・ベニンシユラ・ク エスチオン」 司会 橋本五郎委員 出席 13人

▼北朝鮮—外交クエスチオンに迫る



「北朝鮮の核開発を6カ国協議参加国がどう阻止し、核放棄に持ち込むか。日本は朝鮮

半島からの安全保障の脅威にどのような政策を展開するのか」  
2002年9月の小泉純一郎首相の訪朝、それに続く第2次朝鮮半島の核危機をめぐり日本、米国、中国、ロシア、韓国、そして北朝鮮が展開する外交に数多くの「クエスチオン」を抱き、その真相に迫った。小泉首相をはじめ日米中韓など多数の当事者とのインタビューを織り交せて多角的に再現していく。著書の巻末には約160人に上るインタビューリストが掲載されている。

執筆のきっかけは小泉訪朝だったという。「これほど鮮やかな自主的独自外交は戦後では異例」と評価する。だが小泉首相はそれまで北朝鮮に関心をほとんど示していなかつ

た。「そんな人がなぜ動いたのか。日朝国交正常化を米国は許すのか。調べれば調べるほど疑問だらけだった」。「正常化で北朝鮮の体制安定を図り、南北統一を阻もうとしたのではないか」との見方を示す。

第2次核危機をもたらしした北朝鮮のウラン濃縮開発問題では「なぜ北朝鮮が開発を進めたのか。プッシュ政策内のネオコン派があつたのか」。結論として北朝鮮が秘密裏にウラン濃縮開発を計画したのは間違いないが、米国は計画を過大評価したとみる。

ウラン濃縮開発の理由は分からないとしながらも、米政府による北朝鮮崩壊の意図や北朝鮮の食糧難による体制危機などのシナリオをあげる。だが北朝鮮が核開発に踏み切ったのは冷戦崩壊前の1963年だったことを指摘し「まだまだ闇の中にある」。

日本外交については、拉致問題をめぐる視点での中韓など近隣諸国との大きなギャップが生まれ、米国側にも安倍政権を見極めようという霧囲気があり「このままでは日本は孤立する」と懸念を示した。

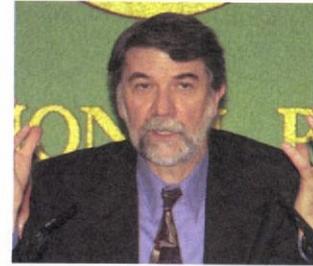
共同通信論説委員 安尾 芳典

ローレンス・レペタ 大宮法科大学院 大教授

4・25(水)研究会「アメリカの底流」  
⑤ 司会 中井良則委員 通訳  
池田薫 出席 51人

▼権力と対立してでも信念を

企画の段階から、かかわったので舞台裏を少し、報告したい。



スピーチの英語原稿は事務局で翻訳していただいた。力を入れて書いているので、思ったより時間がかかる。1カ月にわたり1本また1本と五月雨式にメールで届いた。レペタさんは日本語訳の

1チは日本語で行い、質問には英語で返事する方式も決めた。

会。今度は「法律」を切り口に、と考え、日米の法曹に詳しいレペタさんが思い浮かんだ。昨年出版した『闇を撃つ』（日本評論社）では、イラク戦争をめぐる法律を駆使して政府と闘うアメリカ市民15人にインタビューしている。2月15日、メールで講師をお願いした。訴訟社会や内部告発など法と文化の話題がこちらの当初の想定だった。

快諾の返事が来て、3月20日、事務局も交えてクラブで打ち合わせた。「ブッシュ大統領のイラク戦争政策に抵抗した個人3人をとりあげたい」とレペタさん。ニュースにも連動するし、戦争支持から反対に揺れたアメリカ社会の変化を象徴する話でもあり、おもしろそうだ。スピ

スピーチを、自宅で奥様相手に練習し、本番前夜まで表現を手直したらしい。

とりあげたのは、①令状なし盗聴に違憲判決を出した黒人女性のアンナ・デイクス・テイラー判事②違法な戦争だとしてイラク戦争出征を拒否した日系人のアーレン・ワタダ中尉③息子がイラクで戦死し反戦運動のシンボルとなったシンディ・シーアンさん。クラブのウェブサイトでスピーチは読める。

入念な準備のおかげで、権力と対立してでも自分の信念を社会に表明する個人主義とアメリカ社会の奥深さを考える機会となった。

毎日新聞論説副委員長

中井 良則

山崎 正和 中央教育審議会会長

4・26(木)記者会見 司会 菅沼堅吾委員 出席 65人

▼「読み書きそろばん」に順法

「中央教育審議会会長としての抱負を聞きたい人には幻滅してもらいたくない」

冒頭にこう宣言したものの、「個人の意見」として展開した教育論は刺激に満ちていた。

政府の教育再生会議が教科への「格上げ」を検討している「道徳教育」については「現在の学校制度のもとで、倫理教育をやることは無理だと思っている。例えば人のものを盗んではならない。暴力をふるってはならない。女性を差別してはならない。」

度になじまない」とバツサリ。妊娠中絶を例に「学校で教えられるような、簡単なことではない」と指摘した。

質疑では「現在の道徳教育もいらないと思う」と発言。さらに「あまりに過激なんで、反応が恐ろしい」と前置きし、「歴史教育もやめるべきだと思う」とも語った。理由は単純明快。

「我が国の歴史がかくかくしかじかのものであったということを、国家が決定するのは間違いだ」。教育の現場に政治を持ち込むことへの反対からだ。

もちろん、歴史に対する関心の重要性は否定せず、同じ事象を採りあげながら、見解が対立する2冊の歴史小説を生徒に読ませ、自ら調べることを促すことを提唱した。

会見の最後には再び、中教審会長としては、こういう発言はしないと念を押した。しかし、この人がトップにいる限り、中教審からは目を離せそうにない。

朝日新聞社会グループ

中井 大助



こういう事柄に関しては、共通の認識で教えられるが、本当に、倫理の根底に届くような事柄というのは、実は学校制

## 天衣無縫の政治家

## 中村梅吉氏とお粥の味



田村 哲夫

自民党に昔、中村梅吉という代議士がいた。資料によると、1901年生まれ、三木武吉法律事務所で弁護士生活を始めたが、三木の薦めで28年に東京府会議員となり、36年衆議院に初当選、以来76年の政界引退までの間に、法務、建設、文部などの主要閣僚を歴任したほか、衆議院長まで務めた大物代議士である。

終戦後は一時公職追放の憂き目にも遭ったが、その後復活、「反吉田」の急先鋒で、河野一郎などと日本自由党をつくり、さらに日本民主党を結成、幹部におさまっている。

保守合同後は河野派（春秋会）に所属した。生粋の党人派のこの人の軌跡を見ると、華々しいと言うより、荒々しいと言った方がいいような感じだ。

しかし、直接会ってみるとそんな

荒々しさなど少しも感じさせなかった。駆け出しの私が最初に会ったのは、佐藤内閣の終わり頃だったと思う。河野の死で春秋会が中曽根派と園田派に分裂、中曽根派所属となったが、中曽根会長より17歳も年上の大幹部。すでに60代半ばで「中曽根君を総理にするのが最後のご奉公だ」が口癖だった。

ごま塩頭の色白の巨漢で、澄んだような、しわがれたような声を出す、濃厚でいて豪放磊落な人物。話を聞くと、酸いも甘いも、人の心の表も裏も知りつくしているような感じの人柄で、苦勞してたたき上げた大工の棟梁かヤクザの大親分か、といった印象だった。

目白通りに面した大きな屋敷が自宅。繁茂した庭木の間に住宅と選挙事務所が隠れるようにして立ち並ん

でいたが、立ち働く人はいたって少なく、夜回りに行っても、帰宅を確認するのにまず苦勞するようなどころだった。それでも帰宅してれば必ず会ってくれるし、政局動

向に関しては、派内だけでなく他派の動向まで、知っていることは何でもつつみ隠さず話してくれるので派閥記者には有難い取材先だった。

衆議院長に就任したのが72年暮れ、第一次田中内閣の改造期だった。議長になると普通は派閥記者にはたいした取材先でなくなる。政局の動向に直接絡むような立場でもなくなるし、仮に機微に触れるような情報を知っても簡単には漏らすようなことはしなくなるからだ。自ずと記者の足は遠のく。私も例外ではなかった。



翌73年5月、第71特別国会が会期延長の自民党単独採決などでもめ、野党の審議拒否が始まった。事態打開のため与野党間に割って入った議長は持ち前の調整力で双方の妥協点

を見つけ、最終的に「議長としてはもう単独採決はしない。委員会もそうしないよう努力する」という一札を作って双方に見せ、歩み寄せ、ようやく月末の29日審議再開という線で与野党合意が成立した。議長の手柄である。我々記者も、あの人柄だからまとまったのだらう、と評価した。

ところが、これにほっと安心したのか、たまたま開かれた前任議長の叙勲祝いの席で、国会の収拾劇を説明しながら「野党をごまかしておいた」と喋ってしまった。本人にしてみれば本当のことを分かりやすく言ったつもりだった。

というのも、委員会の採決には議長が口出しなどできないが、野党が委員会単独採決もするなど言うので、努力すると言う言葉でその場をやっと収めた、という経緯を説明しようとして、「ごまかした」という表現を用いただけのつもりだったからだ。

だから野党がこの一言を捉えて、議会無視だ、辞任しろ、と要求し始めたのに最初は面食らった。議長公邸での釈明会見でも「どういふ言葉のアヤで（野党に）捕まったかよく分からないよ」としきりに戸惑っている。気持ちに嘘はなかったはずだ。しかし、雲行きは怪しくなり、せつ

かくつくった審議再開の合意も事実上白紙状態に戻ってしまった。押され気味の与党内からも辞任による事態打開止む無しという声が出始めた。



私も再び目白への夜回りを始めた。どの時点で辞任するかが当面の政局の焦点になってきたからだ。28日には訪日中の英国下院ロイド議長の歓迎行事があるから辞任は難しいだろう。とすると、28日遅くか29日早くという時点が辞任時期だろう、と見通しを立て、27日の日曜日夜、家へ押しかけた。かなり遅い時間になったが待っていてようやく本人に会えた。

率直に、辞任しか収拾の道はないように見えるが、などと生意気な口を利いて考えを尋ねると「ウン、明日の夕方公式行事が終わったら辞めるよ。角さんにも、中曽根君にも話したよ」と実にあっさり言う。

ここまで聞き出せばもう「今夕辞任」と朝刊に確報を打てる。急いで帰ろうと立ち上がると「イギリスの議長もいるから朝刊には書かないでくれ。夕刊ならいいよ」の一言。せっかくの特ダネなのに、オフレコとは残念、とは思いますが、ここまであつげらんこと事情説明されると反論も

出来ない。相手の立場やこれからの関係を考えれば、聞かなかつたふりをして書き得を決め込むわけにもいかない。

社に戻り、朝刊最終版をどういう原稿にしようか散々悩んだ末、「辞任必至の情勢 今日最終決断」と約束ギリギリセーフの原稿にした。次の夕刊なら書いていいといわれているから、早版用に「今夕辞任」と自信に満ちた原稿を書き置いて、帰宅した。しかし、やはり心配で早朝、他紙を見ると某紙は「辞任を決意 今夕発表」と断定報道しているではないか。昨夜の夜回りは単独だったのに、とやりきれない気持ちで早速また家まで押しかけ「ひどいじゃないですか、私には書くなど言っておいて」と愚痴をいうと「そういえば君の帰った後、どっかの社から電話があった、君に話したのと同じことを言ったな。しかし、書くな、というのを言い忘れたのかもしれない」と平気なもの。

「ひどいですよ先生、約束守った方はどうなるんですか」とめめしく、文句を重ねると「いやすまなかつた。朝飯でも食っていけよ」と言いながら、よく煮えたお粥と梅干を出してくれたので、一緒に食べた。

すると、田舎の親父ときこちない

気持ちで一緒に食事しているような感じになってきて、抜かれた嫌な気分も少しずつ収まってくる。帰りの車の中では「そうか、こういう天衣無縫の人だからこそ、ごまかした、とも言ってしまったし、議長のような高い地位もあっさり手放すんだろ」と納得、急に気分が良くなった。抜かれたからその時はしかられた。しかし、約束を守ったからこそ、今になって、人柄もお粥の味も懐かしく思い出せるのだろう。

#### △拾遺▽

氏はその後、法相をもう一度務め政界を引退した。記者との内輪のご苦労さんが開かれた時、我々は公団住宅事件といわれる数年前の事件の顛末を聞いてみた。事件というのは、建設相の時、庶民には高嶺の花だった公団住宅の一部屋をある親しい女性にそつと優先的に割り当てた、と某紙社会面にすっぱ抜かれ、謝った事件のことである。以下本人の弁の採録。

いやー、あの時は参ったね。新聞に出たその夜に、地元後援会の女子部の代表が十人以上で家に押しつけてきてね。「その女性と手を切らないなら今後一切応援しない。この場ではつきり、別れると約束しろ」

というんだよ。困ったことになった、と思ったが、仕方ないから「明日朝返事します。一晚考えさせてください」と言ってその場を取めたんだ。

翌朝早くまた来たから「一晚よく考えてみました。その結果、あの女性と別れるくらいなら選挙に落ちても仕方ないと覚悟しました」と答えたんだ。すると、代表の人もびっくりにしたらしく、しばらくは黙ってしまつたが、中から「ここまでいう先生は、もしかしたら女性の本当の味方かもしれない。このまま応援したらどうか」という意見が出てね、そのうちなんとなくそんな空気になって、最後はみんな納得して帰っていったよ。いやーあの時下手していたら、今まで来れなかつたかもしれないね――

出来すぎた話のような気もするが、あの人なら本当だったかもしれないな、という気が今でも率直にいつてする。今となつては真偽の確かめようもないが、今時分の政治家にはなかなか語れない話であることだけは間違いない。これも時代の流れということか。

たむら・てつお会員 1941年生まれ  
64年日本経済新聞入社 政治部  
など 94年退社 テレビ東京取締役  
など 現在 (株)テクノマックス社長

## 08年米大統領選

## Web時代「マス」から「あなた」へ

▼山本 秀也  
(産経新聞社)

ジェームズ・タラント、と言ってもフレンチ警部が活躍するF・W・クロフツの推理小説「山師タラント」の主人公ではない。スペル違いを許しただけは米紙ウォールストリート・ジャーナルの気鋭コラムニストがその人で、同紙電子版のオンライン・コラム「本日最高のウェブ」が人気を呼んでいる。

## ■ネットは候補を誠実にする

新聞紙上でも健筆を振るう人だが、電子版での活躍が有名になり過ぎて、ウェブの世界にすむジャーナリストという印象が強い。そんなタラント氏にインターネットを通じた08年米大統領選挙の「楽しみ方」を最近たずねる機会があったのだが、返ってきたのは奇抜さを微塵も帯びないコメントだった。

「最大のポイントは有権者に届く候補者の情報量が格段に増えることだと思う。その日の聴衆に応じて都

合のいいことを話す手法はもう通らない。大統領候補はより誠実にならざるを得ないんだ」

老舗新聞社の身売り話が相次ぐアメリカ社会で、タラント氏が立つインターネットと政治やジャーナリズムの交差点はやはり時代の最先端に違いない。その彼からネット利用が進むほど、より候補者の実像が見えるという民主主義のいわば王道をあらためて聞かされたわけだ。

ネットに広がるバーチャル(仮想)空間に虚像のうさん臭さを感じてしまふ私は、長い選挙戦の助走段階で自分の認識不足を思い知る羽目となつた。

## ■動画投稿サイトの威力

票の流れをネットが左右する力など、本当にあるのか。長くネットに信を置いてこなかった私が、少なくともタイミングを選べば投票動向に「深刻な影響を与える」という見方

に傾いたきっかけは、昨年11月の中間選挙での一コマだった。

共和党のホープだったアレン上院議員は、最後の決戦場となったバーミア州で再選を阻まれた。小差での落選は、選挙戦終盤でアレン氏が口を滑らせた「人種差別発言」が響いた結果であることは疑いない。

アレン氏の敗北は、問題の発言をとらえたビデオ映像が動画投稿サイトのユーチューブに貼り付けられたところで始まった。ほんの短いビデオだが、ヒット数は見る見る増え続け、アレン氏は「差別者」のレッテルを貼られる憂き目に遭ったのだ。

動画投稿サイトのないほんの数年前から、この問題は一過性で終わっていたのではないかと思う。選挙後に会った共和党系の人々も、異口同音にこの点を指摘していた。テレビの放送枠に限りがある以上、そう何日も取り上げるネタではなかったからだ。

一つのコンテンツが反復的なアクセスによって社会的な認知を広げるバイラル効果の怖さはここで、私がユーチューブを時折のぞくようになったのもこの舌禍事件からだ。

アメリカ政治の歴史を振り返ると、その時代の先端メディアが、政治のスタイルに革新的な変化を与え

た現象に出くわす。ラジオ然り、テレビまた然りだ。

08年大統領選の情報源を問う有権者への世論調査で「インターネット」(25%)が「テレビ」(21・3%)を上回る時代だけに、タラント氏の指摘するように、ネットを介した候補者と有権者の距離が格段に縮まることは確実なのだろう。

## ■生身の人間臭さ欠乏症？

公式ウェブサイトを開くと、候補者は「マス(大衆)」に呼びかける集会演説のスタイルを捨てて、居間やオフィスでビデオである「あなた」に直接語りかける話法を取り始めていることに気づく。

旧任地の北京あたりに比べると情報への洪水の感があるワシントンだが、これにネットのチェックが加わりとどうにも肩が凝ってしまふ。

パソコンから流れるヒラリー・クリントン上院議員のハスキーな声に飽きた夜更け、ヘッドホンを投げ出しては広いアメリカのどこぞに上海風呂や足裏マッサージ屋はないかと思案をめぐらす日々である。

やまもと・ひでや 1986年入社 シンガポール 台北 香港 北京の特派員を経て 06年からワシントン支局長

## 治療薬タミフル

## 関係者発言の伝え方に悩む

▼高木 昭午

(毎日新聞社)

インフルエンザ治療薬「タミフル」の取材で関係者の発言などの伝え方に悩んだ。言葉の意味が通常と違ったり、言い回しが複雑だったりで短い引用では誤解を招くのだ。

タミフル服用後に、飛び降りなど異常行動を起こす患者が多発した。厚労省は3月、10代の患者への使用を原則禁止した。同省は「服用と飛び降りなどの因果関係は否定的」としてきた見解を白紙撤回し、省に寄せられた副作用報告、約2000例の詳細調査に入った

経過をまとめただけの文章だが、この中に、誤解を招く表現がある。「否定的」という見解は、正確に言うとは、因果関係の否定ではない。

## ■厚労省の不正確な表現

私は05年11月に初めて、タミフルと異常行動の記事を書いた。後輩の中川紗矢子記者が見つつけてきた問題だ。14歳の男子中学生が服用後、マ

ンション9階の手すりにぶらさがり転落死。17歳の男子高校生はトラップに飛び込んで亡くなっていた。

タミフルが原因だと断じるのは無理だった。だが厚労省は04年に医薬品の安全性情報を出し「服用後に窓から飛び降りようとした10代女兒」の例を紹介。タミフルの添付文書に「重大な副作用」として「異常行動」を追加させていた。

薬の世界で「副作用」は、「因果関係が否定できない有害事象」と定義されている。薬以外で生じた異常も含む定義だが、個別の異常の原因を、薬と断定するのは難しいので、安全のためにこうなっている。

飛び降りかけた女兒の例もトラップに飛び込んだ高校生の例も、タミフルの販売元の中外製薬は「副作用」つまり「因果関係が否定できない例」として同省に報告していた。

これらに対する同省見解が「因果関係は否定的」だったのだ。

同省は当時、「否定的」という表現は評価不能も含む」と説明した。実際、05年暮れに同省が「否定的」とした服用後の死者26人のうち、14人は専門家が「情報不足で評価不能」としていた。「否定的」は「否定できないが他の原因も十分ありうる」程度の意味だったわけだ。

同省は今も「因果関係は不明」との立場で、見解は変わらないとも言える。しかし同省の辻哲夫事務次官は3月に「否定的という判断は変わりうる」と会見で話し、各記者に「否定的は白紙撤回か」と激しく迫られた。誤解を招く表現のツケだ。

## ■研究班報告書にも誤解のタネ

厚労省研究班は昨年、「タミフルと異常行動の関連に、明らかかな有意性(統計的に偶然ではないこと)はなかったが、今後の検討が必要だ」との報告書を出した。ここにも誤解のタネが三つあった。

①研究班の「異常言動」は、飛び降りなどの「異常行動」と定義が違い、うわごと程度の軽い異常を多く含む。異常行動とタミフルの関連は検討されていない。②「明らかかな有意性なし」は「関連なし」ではない。調査法の問題で、関連があるのに確認できなかった可能性を含む。③「今

後の検討が必要だ」は、結論保留を示す重要な文言で省けない。

## ■振り回された一部の記事

だが、報告書を紹介する記事の一部には「タミフルと異常行動、関連なし」などの見出しがあった。厚労省は「検討が必要だ」を省いて報告書に言及し「因果関係は否定的」と言う根拠に使った。

さらに同省は従来、「インフルエンザを甘くみてはいけない」「タミフルは有用性が高い。インフルエンザ対策に必須」などと訴えてきた。一方で最近では「元気な10代は、インフルエンザになっても家で寝ていれば治る」と説明している。

「持病のある患者や高齢者にインフルエンザは怖い。タミフルは必要だ」という医師は多い。「高齢者などは」インフルエンザを甘く見るなどか「社会全体の」インフルエンザ対策にタミフルが必要というなら分かる。だが元の表現では、タミフルは万人に必須と受け取れる。誤解されない言葉を使ってほしいものだ。

たかぎ・しょうご 1988年入社 編集  
センター 社会部などを経て 05年から  
3度目の科学環境部

高松塚石室解体

報道の自由と作業の安全  
のせめぎ合い

▶高瀬 法義  
(奈良新聞社)

特別史跡に指定された古墳の石室を解体し国宝の極彩色壁画を修理保存するという、わが国では他に例を見ない大事業が始まった奈良県明日香村の高松塚古墳。4月24日現在、16枚ある石材のうち天井北端石と四神図「玄武」が描かれた北壁石の取り上げに成功した。

解体作業は石材を特殊な器具で固定してレールクレーンで一枚ずつ吊り上げ、振動の発生を抑えた特殊車両で約1キロ離れた壁画修理施設に運ぶ。石は凝灰岩で非常に柔らかい上、亀裂が発生した石材もあり、わずかな振動でも損傷や落下の危険性

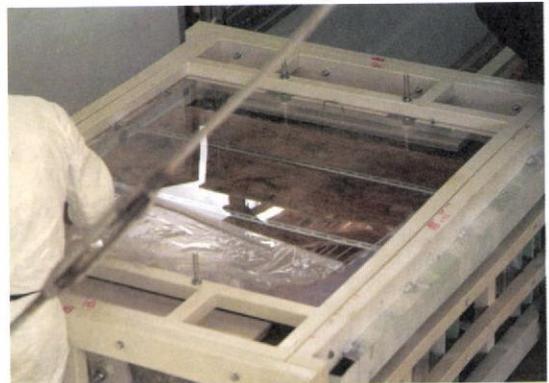
がある。万一、壁画を壊してしまえば、1300年の歴史が一瞬にして失われてしまうことになり、解体を行う文化庁には非常に困難な作業が要求される。

「世紀の解体作業」を伝えるべく、人口約6200人の静かな山村には連日、多くの報道陣が詰め掛けている。作業は壁画への影響を抑えるために温度、湿度を管理した「断熱覆屋」のなかで行われ、内部の立ち入りは厳しく制限。そのため、地元の高松塚古墳の歴史を語り継ぐ文化庁との交渉に明け暮れた。

全面公開を求めるクラブに対し、文化庁は取材制限の理由に、人間の体温による覆屋内の温度上昇やカビの発生のもとになる細菌の侵入などのほか、作業員への重圧を挙げた。

解体作業を担うのは、多くの文化財修理を手がけた石工・左野勝司さん率いる職人たち。たしかに、失敗が許されない作業を行う彼らにかかる重圧は並大抵のものではない。「多くのカメラが並ぶことで、作業に支障を与えかねない」と文化庁の担当者。

しかし、報道公開がなければ、断



玄武が描かれた高松塚古墳北壁石

熱覆屋という完全な「密室」のなかで作業が行われることになる。文化庁は発見以来約30年間、カビの発生による壁画の劣化や修理作業中の損傷事故などを公表しなかったことで、情報公開・説明責任への姿勢や組織体制を厳しく問われた。

そうした観点から見ても、国民的関心事である石室解体を非公開とする姿勢は疑問が残る。一方、取材側のクラブ内部でも、「報道の自由」と「作業の安全」のせめぎ合いの中で取材制限を認めるか議論が続いた。

最終的には作業の要所で記者2

人、スチールカメラ1人、テレビカメラ1人の計4人による代表取材・撮影で合意。加えて文化庁の定点カメラの映像を、クラブが設置したモニターで流すことで作業の様子を取材することになった。文化庁は現在、16枚の石材のうち5枚の作業だけ代表取材・撮影を認めているが、すべての石材で公開するように交渉が続いている。

解体作業を指揮する奈良文化財研究所の担当者は、「石室解体はあくまで壁画修理の第一歩に過ぎない」。文化庁は今後、10年間かけて壁画を修理する予定だが、失われた壁画の輝きを取り戻せるかが本当の問題といえる。

たかせ・のりよし 1992年入社 郡山支局 高田支局などを経て2006年から橿原支局

一口メモ 明日香村

奈良盆地の南端に位置し、総面積は飛騨の約1.5倍、人口6230人。蘇我馬子と推定される古墳群が点在し、特別史跡として指定されている。高松塚古墳は、7世紀初めに造られたと推定されている。壁画は凝灰岩でできているが、劣化が進んでいる。昭和47年、カビの発生による劣化が深刻になり、解体作業が行われた。

## ■マンモスの暴走エリツイン会見

ロシアのボリス・エリツイン前大統領（76）が4月23日死去しました。エリツイン氏は1990年1月、ソ連最高会議代議員としてクラブで会見しています。注目の急進改革派。出席者は250人でした▼儀礼的なあいさつもオープンニングリマークスも全くなし。冒頭から質疑応答に入るよう司会者に要求。通訳

者泣かせの90分でした▼巨体から飛び出す答えも過激なら、声も迫力満点。通訳の日本語が終わるのを待ちきれずに、次々と「バズーカ砲」が発射されるとい感じでした▼ロシア語通訳者としてデビューしたての米原万里さん（昨年5月25日死去）と彼女が師とあおいだ徳永晴美さん（現上智大学教授）が、この突進を交代でさばきました▼私案として「北方領土5段階返還論」を示し二

ユースになりました。これが大統領として北方4島の帰属を解決して平和条約締結を目指した「東京宣言」にもつながっていったのでしょうか▼このとき、「90年がソ連の正念場になる」と発言したエリツイン氏でしたが、翌91年8月、保守派クーデターを鎮圧し、ゴルバチョフ氏に代わり権力の座に。そして12月にはソ連邦解体——。（長谷川）

△寄贈書▼  
楠ノ木考 田所泉作品集  
作品集編纂委員会 小沢信男代表  
軍縮 地球市民 春 No.8  
明治大学軍縮平和研究所  
△招待券▼ご寄贈いただきました  
ヴィクトリア アンド アルバート美  
術館所蔵 浮世絵名品展  
MOTTA INAIへ〜キャンペーン  
報道の力 日本新聞博物館

## リレー エッセー

## 甲子園①



春先からスコアブックの付け方の研修を受けたり、事前の準備取材で高校回りをするなど、野球漬けで明け暮れているうちに夏の県大会が始まり、磐城高校の初出場が決まった。信夫が丘球場での試合は、地域ぐるみの応援が時には

新聞だけだったから、私はチームの一員のようなもの。甲子園入り後は宿舍といわず練習場といわず、監督や選手に密着の日々だった。県版向けに連日、選手たちに「甲子園日記」を書いてもらった。

福島勢はそれまで甲子園ではいず

記事にはすべて「甲子園で箱島記者」という署名が付いた。本記のほか雑観や戦評など、連日せっせと書いたものだが、2年生記者にとって甲子園はとてつもない大きな舞台であり、まるで特派員になったような気分だった。

99年の81回大会で、大会会長として甲子園のグラウンドに久々に立った。選手たちの若さみなぎる入場行進を目の当たりにした時、私は胸にこみ上げるものを心地よく抑制しながら、36年前の夏の自分をスタンドの中に探していた。

（はこしま・しんいち 朝日新聞社特別顧問）

今号からは若き日の記者修行の場でもある。甲子園をキーワードに、夏季大会が始まる8月号までバトンをつないでいただきます。

## 初の大舞台気分は特派員

## ▼箱島 信一

過熱し、県立と私立校の試合の際、スタンドから「私立のボンクラ！」といった、いささか不穏当なヤジが飛んだりしたものだ。

磐城校が初出場ならこちらも初出場だ。当時は同行取材したのは朝日

いう快挙を遂げた。磐城の得点に思わず「やった！」とネット裏の記者席で拍手したら、近くにいたデスクから「記者が興奮してはダメだ」と叱られ、シユンとなったことも今では懐かしい思い出だ。

高校野球を担当したのは、福島支局員だった入社2年目の1963年（昭和38）のことだ。当時は宮城と福島が甲子園出場をかけた戦い圧倒的に宮城勢が優勢だったが、この年は45回の記念大会ということで各県から代表1校が出場した。甲子園から遠のいていた福島の球児たちが大いに張り切ったの言うまでもない。私も記者として甲子園出場が確実だったから緊張した。



新丸の内ビル  
4月24日(火) 参加=50人

丸の内に「パリの癒し空間」

ニューヨークを朝7時に散歩すると、もうビル内のジムで汗を流す男女が大勢いるのにびっくりしたが、新丸ビルには立派なジムがある。運動しながら皇居と議事堂が見渡せるのは大変な贅沢だ。皇居の見えるジムがお目当てでここに引越す外国企業も少なくないのでは。

なんと言っても東京駅から皇居に通じる「行幸通り」に面したビルだから、ポストモダン遊びの心は控え、気品・風格を狙った外観。中に入ると青銅色の柱とアーチが目につく。重厚さを狙ったのだろうが、リズムミカルなアーチのおかげで重苦しさを冷たさは感じさせない。

千代田区丸の内1-5-1  
地上38階、地下4階  
「丸の内再構築」第1期の締めくくりとして4/27開業。10~37階のオフィス部分は29のテナントで満室に。ベンチャー企業支援拠点「日本創生ビレッジ」には17社が入居している。地下1階~地上7階の商業ゾーンは、飲食40と物販113の計153店舗が営業している。

ビルの5分の1は店舗。オフィス一色の「仕事する町」だった丸の内全体が「楽しむ町」へと変貌の途上らしい。1・2階はパサージュと称し、アクセサリー、バッグ、チョコレートなど、ちよつと覗きたくなるこぢんまりした店が並ぶ。

パリを歩いてふとパサージュに迷い込むと、100年ほどタイムスリップしたような、快いめまいを感じた。狭い裏道に屋根をかけるだけでどうしてあんな親密な空間ができるのだろう。パリの七不思議だ。車道やビルから隔離され、人間が主人になれる箱庭的空間がパリのパサージュの魅力なのだろう。

新丸ビルは各階900坪のオフィス空間を誇るが、広すぎるオフィスで神経が疲れたとき、狭くて楽しいパサージュが小さな「癒し」を与えてくれるかもしれない。

フジテレビ出身

松浦 茂長

社会派ジャーナリストの訃報

ベトナム戦争報道でピュリツァー賞の元NYタイムズ記者のデービッド・ハルバースタム氏(73)が、交通事故で4月23日死去。加州大バークレー校ジャーナリズム学部で話した後、学生が運転する車で移動中だった、と24日付夕刊に▼「覇者の驕り」の邦訳出版で来日した1987年5月クラブで会見した。会報・クラブゲストの記事によると、「もともとアメリカ的な自動車産業が、なぜ、どのように日本に抜かれたのかを、(この本で)描きたかった」と。米国産業衰退の原因は成功に安住し、マネーゲームにのめり込み、開発・製造から財務部門へ権力が移行したためだとも。20年を経過して、

短い記事を読み直すだけで、時間の鏡にはいろんなことが映し出される▼最後の質問に答えて、こんな発言を。「ベスト&ブライテスト」を書いたころより賢い記者になっていると思う。当時は政治記者だったが、今は社会派ジャーナリストになったと思う。さらに、私は自動車には関心をもつてこの本を書いたとも▼社会派になった氏は、その後も数々の優れたノンフィクションを発表。硬派ものだけでなく「男たちの大リーグ」「ジョーダン」なども。偶然、NHKの衛星を見ていたら、米PBSがニュースの中でかなりの時間をさいて、このジャーナリストの業績をたたえ、報道していた。(五)



HAPPY NEWS 2006表彰式  
大賞は神奈川新聞「命を救い完走」

読んでしあわせになった記事とその理由を書いたコメントを募集する春の新聞週間キャンペーン。滝鼻卓雄理事長(写真左)は新聞協会の新聞メディアの強化に関する委員会委員長として選考にあたった。大賞は神奈川新聞「命を救い完走」(07.2.20掲載)を推した大学生柏木克仁さん(中央右)。東京マラソンに出場した横浜市救急救命士吉田茂男さん(同左)がゴール直前、心肺停止で倒れていた男性ランナーの救命措置を優先し、意識回復を確認してからレースに戻ったことを伝えたもの。吉田さんも「HAPPY NEWS PERSON」として表彰された。賞状のプレゼンターはタレント真鍋かをりさん。入賞作品は新聞協会ウェブサイトに掲載されている。(4.5 10階ホ

コマンダンテ…独裁者の人間的な顔

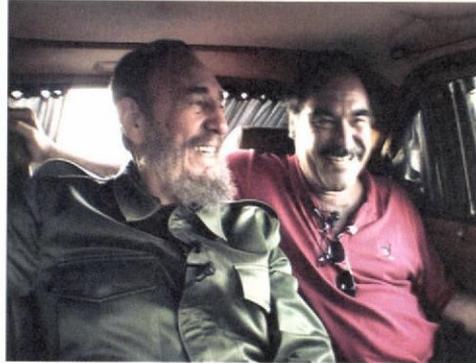
弊社ビルが日比谷に移転し、プレスセンターが近くになったおかげで、日本記者クラブの試写会に足を向ける回数が自ずと増えた。「カストロのドキュメント? 監督オリバー・ストーン? この時期、見という損はなし」と、今回も気軽に会場へ。

新作ではなく2

002年、スペインのテレビ局の依頼で制作された作品だ。3日間、延べ30時間にわたるカストロ議長とのインタビューを百分に編集している。

インタビュート言っても、座ったままのやりとりではなく、執務室から街頭、車中、食事時のレストランまで、議長に密着する同行取材。その間に、革命によるバチスタ政権崩壊、キューバ危機からエリアン君事件までキューバ現代史の映像が織り込まれ、監督自身も質問を連ねて行く。

「アメリカ打倒を訴える真意は」  
「独裁者と呼ばれているが」「宗教は



アヘンか」。受け答えは早い。「打倒すべきは腐敗だ」「私は国民の奴隷」「人を癒す宗教もある」。演説慣れの故か、言葉は自然に流れ出る印象。「好きな女優は?」「バイアグラは試したか」といった曲球の処理は見えてお楽しみだろう。世の「独裁者」

も、時におやつ、と思わせる人間的な顔を見せる。それが作品のトーンだ。チェ・ゲバラ、長男フィデリートらとの貴重な映像も。

欧州、カナダなど各国では上映済み。米国では03年にインディペンデント映画を対象とする米サンダンス映画祭でプレミア上映されたが、その後HBO(米最大手の有料チャンネル局)で放送する計画は、当時キューバで起きたフェリーハイジャック事件の影響もあって中止され、今に至るも未公開という。再度のインタビュートに基づく姉妹編は放映されている。

東京新聞外報部長 安藤 徹

©2003 - Mediaproducton SL. 2002  
All rights reserved.

「小泉自民党のや・ま・う・ち・かずひこ、市政改革を進めます」

2005年10月、神奈川県川崎市宮前区の私鉄駅周辺で40歳の男性が声を張り上げるシーンから始まる。指南役が教えたのだから、名字4文字を1字ずつ切って繰り返す。旗指物、拡声器など小道具一式を候補者自らが持ち歩く。行財政改革の言葉は踊るが具体的な中身は不明だ。

映画は川崎市議補選に出馬したこの山内和彦氏の選挙期間中の10日余りを追う。政治家志望の野心に満ちた顔とは程遠いどこか頼りなげな風貌だ。都内で切手コイン商を営んできた市井の人がすすめられて自民党の候補公募に応じて選ばれ、地縁もない落下傘候補として川崎にやってきたのだ。

この補選で議席を落とすと自民党は市議会第一党の座から滑り落ちるとあって、地元選出県議、市議らがシロウトの山内氏に「握手する時は相手の目を見よ」と指導し、時に「やる気があるのか」と叱責する。保育園や老人会の運動会に連れて行かれ笑顔をふ



りまき、神社のお祭りで神輿をかつぐ。同じ選挙区の先輩市議の後援会メンバーを訪ね、「今回だけお世話になります」と頭を下げる。一緒に走り回る夫人にも周囲から「妻ではなく、家内と言いなさい」と注文もつく。外資系企業に勤める結婚3年目の夫人は「あんたがしっかりしないから」と夫に声を荒げる場面も。どたばた劇は映画自体も同じだ。

東大時代の同期生でニューヨーク在住の映画監督の想田和弘氏が帰国して急きよ一人で撮影、編集した。シナリオも音楽もナレーションもなく、候補者や周辺の動きを追うだけの「観察映画」と称する作品ができあがった。選挙は大接戦で当選。しかし1年半後の今年4月の川崎市議選立候補者に山内氏の名前はなかった。冷酷な表現をすれば補選要員として使われ捨てられたと言えないこともない。しかし、日本の選挙の断面を見事に描いた映像は残った。

日本経済新聞編集委員 中西 晴史

©Laboratory X, Inc

選挙…その断面を見事に描写

マイBOOK  
マイPR

歴史の教師 植村清二

植村 鞆音

(テレビ東京出身)

第二の人生は、幼いころからの憧れだった著述業を一本の柱に生きてみよと思った。第一作が、一昨年上梓した伯父の評伝『直木三十五伝』(文藝春秋)。第二作が、このたびの

『歴史の教師 植村清二』である。これは、昭和の初めから終わりにかけて、61年の長きにわたり一教師とおした父の伝記である。ひとりの教師の生き方とおして、今日の日本をもたらしした戦後の教育を考えてもらえば、著者としてそれ以上のことはない。

(中央公論新社 1890円)

戦争指揮官リンカーン—アメリカ大統領の戦争

内田 義雄

(NHK出身)

アメリカの「自由と民主主義のための戦争」は南北戦争から始まった。軍事に素人だったリンカーン大統領は、当時の最先端技術であるモース電信を駆使して將軍達を動かし北軍を勝利に導いた。だが、戦死者62万という凄惨な戦争となった。南軍

のリー將軍は語った。「戦争がむごたらしいのはいいことだ。そうでないと、我々アメリカ人は戦争が好きになり過ぎるかもしれない」。アメリカの戦争の原型となった南北戦争をひもとく。(文春新書 903円)

笑って泣いて歩いて書いた  
—女性ジャーナリストの五〇年—

金森 トシエ

(読売新聞出身)

1960年代から80年代にかけて書いた署名原稿を中心に選んでまとめた。結婚・出産退職制、女子若年定年制など労働をはじめ政策参加、福祉、家族などさまざまな領域の女性差別が浮き彫りにされて、一種の女性史といえよう。

同時にサラリーマン家庭の専業主婦の日々に疑問を持ち、大学生に新聞記者にとチャレンジした自身の経歴や写真を加えて個人史ともなっている。(ドメス出版 1890円)

ワーク・ライフ・バランスの実践—企業事例に見るその手法と実際—

久谷 興四郎

(読売新聞出身)

「ワーク・ライフ・バランス」と

という言葉が、経営者の中で一般化し始めている。背景にあるのは底の見えない出生率の落ち込みと、「次世代育成支援対策法」の施行。政府は企業に「家庭生活と両立できるような働き方」を求めている。とはい

え、「過労死」や「サービスマン残業」を国際語にしたわが国のこと、解決法が簡単にあるわけでもない。試行錯誤が続いている企業の現場をルポし、その中から他の企業にも実務ヒントとなる情報を探し出して提供した。

(日本リーダーズ協会 1300円)

映画で学ぶおしゃやかな英語

原島 一男

(NHK出身)

「英語を話せるようになる一番良い方法は、映画のセリフを覚えることだ」と気がついたのは50年も前のこと。映画には、心に響く言い回しがあちらこちらに出てきます。人生の機微に触れていたり、微妙で繊細な感情が込められていたり。

この本では、「タイトニック」から「ミリオンダラー・ベイビー」まで45本を選んで、それぞれの映画から印象的なフレーズを取り上げました。また、そのフレーズが、ほかの映画ではどう使われているかにも注目し、TPOによって使い方の違い

を比べられるようにしました。(NHK出版 1260円)

反骨の記者 松林岡

堀越 作治

(朝日新聞出身)

数ある記者の中でも、これほど波乱に富んだ人がいただろうか。小学校を出るか出ないかで大杉栄入門、無政府主義を叫んで駒込署にぶち込まれた。

苦学の末、時事新報の記者になるが、「満州事変に出兵するな」という反戦ビラを撒いてクビに。地方紙の通信員としての活躍が見込まれて朝日新聞に拾われるや、二・二六事件などで特ダネを連発。

中国戦線では従軍記者として何度も死線をくぐり、南方でも活躍。戦後は各地の支局長として後進を育成。今年満102歳を祝った。

(東京図書出版会 1260円)

二・二六事件とは何だったのか

前坂 俊之

(毎日新聞出身)

70年経った今でも、日付をもって呼ぶ以外に名づけられていない昭和11年の「2・26事件」。国内外のメディアの報道と、同時代人の受け取り方を総合的に検証したもの。私の

担当は朝、毎、読、時事などの日本の新聞の報道、雑誌の特集などの分析で約50頁。同事件が言論の自由に完全にトドメをさした経緯を明らかにした。世界のメディアの報道ぶりも各国10紙を紹介しており興味深い。昭和史研究の必読書。

(藤原書店 3150円)

### 高松塚古墳は守れるか

毛利 和雄

(NHK解説委員)

地下から現れた飛鳥美人に日本国民は驚嘆した。ところが34年後の今、古墳は解体に追い込まれている。保存修復の過程のどこに問題があったのか探ってみると危機管理の態勢に欠ける霞が関の通弊が浮かび上がった。それでは現地で保存する方策はあったのか、保存科学の面から探ってみた。高松塚壁画の保存問題を100年を超える日本の文化財行政の歴史の中に位置づけて論じた。

(日本放送出版協会 1124円)

### マスコミ生存の条件 Web 2.0 が変えるメディア地図

吉村 久夫

(日経B.P.特別参与)

清華大学で「日本のメディア・現状と課題」を6回に分けて講義した。

優秀で熱心な学生に教えるために、半世紀近く過ごした日本のメディアの実態をあらためて勉強した。

マスメディアはインターネットの登場によって世界的に歴史的な岐路に立たされている。だが、既存メディアの重要性はむしろ高まっている。情報氾濫のネット社会にあって、マスメディアは今こそ本来の使命を再確認し、高い志を持って、より良質の情報を提供すべき責任がある。

(日経B.P.企画 1470円)

### 「青森・東通」と原子力との共榮

渡部 行

(日本工業新聞出身)

原子力発電が世界的に再評価されているなか、日本で原子力関連施設が集中立地されているのは、青森県下北半島だ。3つの原発、原子燃料のサイクル施設、中間貯蔵、核融合実験施設などが揃い、今や世界一の原子力平和利用センターに発展している。総投資額は5兆円に達する見込みで、地域振興でも大きな成果を上げている。現地取材を中心に、この雄大な国策プロジェクトをレポート。多くの関係者にもインタビューしている。

(東洋経済新報社 1890円)

### ありがたきかな伝家の宝刀 —米国で実感した会員証の威力

キューバも含め世界各地の民族問題を研究している畏友Kさんのお誘いをいただいて、滞在先のニューヨークからメキシコのカンクンを経てハバナ入りしたのが2月27日の夕刻だ。そこで、成田からカナダ経由で直行してきたKさんから6

す、と気の毒がる案内嬢の目が私はずらりと並べたカードのひとつにとまった。彼女は叫んだ。「Oh、日本のナショナルプレスクラブのメンバーのお方！ 大歓迎です」。数日後、私は「ハーバードのID以外入場厳禁」と掲示され警備線を張りめぐらしたケネディ行政大学院の、黒山の人数だかりのする玄関にいた。こんどは迷わず会員証を差し出した。大学広報官が呼ばれ警官と2人がかりで丹念に点検しおえると、演壇周辺のプレス専用席まで丁寧に案内してくれた。学生たちの繰り出すタフな質問に、ときにたじろぎつつもひたむきに答えぬくドビルパン仏首相。そのたびに満場がスタンディング・オベーションで応えた。

講演後、人混みの力で首相のすぐ側まで押しつけられた私をボディガードが荒々しく排除しようとしたが、その腕をかくぐってド首相が手を差し出して握手してくれるというおまけまでついてきた。米国のナショナルプレスクラブといちはやく兄弟関係を結び、クラブを世界に開く努力を積み重ねてこられた先達の方々にあらためて脱帽・感謝する。

NHK出身

鈴木 博信

◆会議報告◆

2007年度日本記者クラブ賞選考委員会 (4・6 大会議室)

クラブ賞推薦委員会の佐藤信行委員長長の報告を受けた後、選考に入り、松本仁一(朝日新聞編集委員)、清水美和(中日新聞東京本社論説委員)の両氏を授賞者として理事会に答申することを決めた。

出席 朝比奈委員長、喜多、住田、竹田、宇治、金平、島田、小櫃、玉川の各委員、滝鼻理事長、吉田、石村の両副理事長、岩崎専務理事。

第281回会報委員会(4・9 小会議室)

4月号について意見交換した後、5月号の編集について協議した。

出席 住田委員長、伊藤、仙石、高橋、松本の各委員。

●ゴルフの会

長谷川創一会員が初優勝

第88回ゴルフ会が好天に恵まれた4月27日(金)、東京よみうりカン



トリークラブに23人(初参加5人)が集い、開催されま

した。昨年

第364回企画委員会

(4・10 宴会場)

司会をした委員からの行事報告の後、今後のゲスト候補や7月の参院選への対応、8月に開催する記者研修会などについて意見を交換した。

出席 宇治委員長、宮田、石井、山田、中井(良)、橋本、中井(康)、長谷部、矢島、菅沼、長谷川、田崎、國府、井田、和田、中島、藤村、柴田の各委員。

第356回会員資格委員会

(4・17 シルバールーム)

新委員の森嶋幹夫毎日新聞論説副委員長(旧・高畑昭男氏)を紹介した後、5月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 森嶋、伝川、石川、二藤部、今井、田中、柿原、今田の各委員。

秋の大会が大雨で中止になったため、今回が出直しのコンペ。

「あの大雨のことを思うと今日はすばらしい条件のもとでプレーできたことが勝因」と優勝の弁を語ったのは長谷川創一会員(写真上・広島ホームテレビOB)でした。

2位は初参加の青木徹郎会員(TBSOB)、3位は同じく初参加の小林樹会員(テレビ朝日OB)でした。懇親会では、肋骨を折っても、医

第34回監事会

(4・17 大会議室)

2006年度の会計監査を行った。出席 山本、中西、舟橋の各監事。

第93回総務委員会(4・19 小会議室)

①2006年度事業報告・同収支決算案ならびに次期繰越収支差額処分案(次期繰越収支差額6786万9263円のうち、資産準備積立預金に2000万円、退職準備積立預金に1000万円、増加賃料積立預金に1000万円をそれぞれ積み増しし、2786万9263円を次期に繰り越す)を決定した。②役員選出委員会(総務委員会で構成)として第18期(07・08年度)役員構成社案の原案を承認した。

出席 朝比奈委員長、竹田、島田、

鳥居の各委員、滝鼻理事長、吉田、石村の両副理事長、岩崎専務理事。

第438回理事会 (4・19 大会議室)

①2006年度事業報告・同収支決算案を次期繰越収支差額処分案とあわせて総務委員会案通り承認し、第70回総会に上程することにした。

②2007年度日本記者クラブ賞を、選考委員会(朝比奈委員長)の答申通り、松本仁一、清水美和の両氏に贈ることを決定した。

③第18期(07・08年度)役員構成社を、役員選出委員会案通り決定した。

出席 滝鼻理事長、吉田、石村の両副理事長、岩崎専務理事、朝比奈、竹田、目、妹尾、島田、熊村、佐藤(重)、高木、鳥居、佐藤(嘉)の各理事。山本、中西の両監事。

●囲碁の会 (4月28日)

ゴールデンウィーク初日、関東地方は強風と雷雨の荒天。しかし、クラブ碁会所は22人の会員で賑わいました。伊藤光彦会員も久しぶりに顔を見せてくれました。

07年度を好成績でスタートしたのは塚本一(4連勝)、山城孝夫(3連勝)、石橋俊彦(4勝1敗)、佐沢利和、相川誠一、安田志郎(ともに3勝1敗)のみなさんでした。(河野)

取材記者が直面する様々な問題について新聞・放送界OBと現役記者とが率直に意見を交換し切磋琢磨する懇談会「土曜サロン」が今春、6周年を迎えました。

2001年4月28日から、原則として隔月最終土曜日の午後2時半から5時半まで、毎回20〜30人が参加してプレスセンター9階クラブレストランで開いています。3月31日の第36回で6周年となったわけです。

#### ■青木彰さんの発案でスタート

もともと、産経新聞編集局長の後、筑波大学などでジャーナリズムを教えるべく、青木彰さんの発案で朝日、毎日、読売、日経、共同通信のOBが参加した懇談会が始まり、その後、中国新聞、NHKのOBも加わった「三水会」(隔月第3水曜日夜に懇談)が母体でした。

インターネットを中心に21世紀のメディア・ビッグバンが到来して新聞・通信・放送の現場が大きく揺さぶられている中、第一線の記者やデスクたちが苦しみながら取り組んでいる具体的な問題を討議したテーマは、幅広く多岐にわたっています。

▼過熱取材・報道と被害を考える  
▼現場から見た記者クラブ改革▼取

材規制と報道萎縮のはざまに▼危ない銀行・企業をどう報道するか▼永田町政治をどう取材・報道するか▼国際報道の新しい手法を探る▼スポーツ報道▼報道と第三者機関▼メディアと女性▼世論とメディア▼皇室報道の問題点▼いま地方紙が元気▼ライブドアによるニッポン放送買収▼ブログ・ジャーナリズムに期待できるか▼いま、なぜジャーナリスト教育か▼小泉政権5年とジャーナリズムの反省▼サマワその後 自

## 「土曜サロン」にもっと参加を

### 現役・OBの切磋琢磨で6周年

衛隊は何をしたのか▼テレビのある問題▼その背景と波紋(前回)など。

#### ■まだ少ない現役記者の参加

しかしこの「土曜サロン」も、せっかく内容のある議論で将来への具体的な処方箋も出せるようになったのに、「サロン」として改革すべきいくつかの問題が、次のような反省として浮上してきました。

①土曜日午後のためあつて現役の

出席が少なく、OB・OG中心になる傾向が強い。討論でも現役の発言が少なく、OBだけが古い常識をベースに議論する結果になりがち。

②毎回、テーマに詳しいだけでなく現役のゲスト・スピーカーに最初に報告してもらった上で討議するが、ゲストへの質疑応答に時間をとられて議論が十分に深められない。

③6年経ってテーマが一巡したこともあり、個々の問題にばかりかわかって、ジャーナリズムの基本に立ち

返った討議が希薄になった。

④討議の内容を、特に現役の立場を考慮して原則オフレコにしているものの、必ずしも突っ込んだ議論になっていない。

#### ■各社の記者研修に利用の案も

いずれも「サロン」の参加者の中から出てきた反省ですが、これらを改める次のような改革案も出てきています。

①現役も出やすいように、曜日・時

間を再検討、各社の記者研修の場にも利用できるように各社に担当者を決めてもらうなど、協力を求める。開催の案内も各社の編集・報道局や研修部門などに幅広く出す。

②テーマの設定を現役向きにし、ゲスト・スピーカーも現役の関心の高い人を選ぶ。

③議論するだけのサロンから問題提起の場へ進め、ジャーナリズムの改革を中心に据える。

④原則オフレコを原則オンレコにし、発言者の希望で指定箇所だけオフレコにする。討議の成果も出版物やブログなどで公開する。

\*

こうした状況をふまえて、「土曜サロン」改革へのご意見とともに、日本記者クラブ会員のサロンへの積極的なご参加と、そこでの活発なご討議、ご提案をお待ちしております。

(「三水会」世話人 中江利忠)

#### 次回「土曜サロン」のお知らせ

5月26日(土) 午後2時半からプレスセンター9階クラブレストラン。テーマは「野球界とカネとメディア」。ゲスト・スピーカーは、朝日新聞編集委員・西村欣也さんと元NHKスポーツプロデューサー・杉山茂さんです。

## 情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われていま  
す。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてク  
ラブを利用しています。

## ■「星の王子さま」原画発見 記者懇談会

サン＝テグジュペリの直筆原画が山梨県の「えほんミ  
ュージウム清里」で現存していることが確認された。原  
画公開を前に渋谷稔さん（同美術館主宰）とサン＝テグ  
ジュペリのおい・フランソワ・ダゲー氏らが会見した。  
原画は下記の地方巡回展で公開される。（4.4 宴会場）

◆大丸ミュージアム京都（5.16～5.28）◆大丸ミュージ  
アム神戸（7.18～7.30）◆大丸札幌店（8.8～8.20）◆三  
越名古屋栄店（8.29～9.9）

照会先：同展覧会広報事務局 Tel：03-3401-6741  
（エフココミュニケーションズ内）

## ■日本ジャーナリスト懇話会 4月例会

中村史郎朝日新聞外報グループ次長が「中国の世界戦  
略と対日関係」のテーマで講演した。（4.17 大会議室）

## ■ボーン・上田記念国際記者賞授賞式

同賞は国際報道で優れた業績を挙げたジャーナリスト  
に贈られる。2006年度は朝日新聞中国総局の坂尻信義記  
者（41）と共同通信外信部（前ワシントン支局員）の太  
田昌克記者（38）。坂尻記者は北朝鮮の核問題をめぐる  
6カ国協議関連の一連の報道と、中国の胡錦濤主席のイン  
ド初訪問のスクープが評価された。太田記者は米国立  
公文書館などの資料をもとに戦中・戦後の史実を発掘し  
たほか、北朝鮮の核実験が失敗だったとの米政府の見解  
をいち早く伝えるなど核をめぐる問題でも優れた報道を  
続けたことが評価された。（4.17 10階ホール）

照会先：日本新聞協会総務担当 Tel：03-3591-4402

## ■未来をひらく日本委員会 10周年記念特別講演

同委員会（尾畑雅美代表・元NHK）の10周年記念と  
して日本経済新聞の杉田亮毅社長が「新しい地平をひら  
く」と題して講演した。コーディネーターは毎日新聞の  
岸井成格特別編集委員。（4.19 10階ホール）

照会先：同委員会事務局 Tel：03-3592-9500  
<http://www.nihoniinkai.com/>

## ■ニュージーランド農林水産大臣記者会見

ジム・アンダーソン農林水産相兼バイオセキュリティ  
ー相が来日した。「BSEはわが国では発生していない。  
今後も発生リスクが最も低い国と位置づけられている」  
と語り、品質、安全性に関心が高い日本の消費者に自国  
の農産物は十分応えられるとPRした。会見後は隣室で、  
NZ牧草牛の料理とワインを楽しむレセプションも行わ  
れた。（4.23 10階ホール）

照会先：ミート&ウール ニュージーランド  
[info@newzealand-beef.jp](mailto:info@newzealand-beef.jp)

## ■アーミテージ元米国務副長官講演会

アーミテージ氏が中心となり対アジア戦略と政策提言  
をまとめ、「日米同盟 2020年までのアジアの望ましいあり  
方への展望」（アーミテージ・レポートII）として発  
表した。そのレポートを踏まえ日本の進路について講演  
した。主催はUS-Japan LINK（田村玲子理事長：元産経）。  
（4.26 10階ホール）

## 新しいOB会員

## ■読売国際会議特別フォーラム「日本の決断—憲法のあり方を考える」

憲法施行60周年を記念して東京会議・読売国際経済懇  
話会、読売新聞憲法問題研究会が主催した。中山太郎衆  
院憲法調査特別委員長が基調講演した後、船田元同委  
員会自民党理事、枝野幸男民主党憲法調査会長、赤松正  
雄公明党憲法調査会座長、中西寛京大教授、北岡伸一東  
大教授らが討論した。（4.28 10階ホール）

照会先：読売新聞調査研究本部 Tel：03-3216-8904

## バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

吉  
カクテルスタンダードジャズ・シリーズ  
5月は「SAMBA PATI 君に捧げるサンバ」

カクテル名は「黄色いバラ」です。ドライジンとマラスキーノをベースに、オレンジジュースとレモンジュースなどでアレンジしました。

和  
食

## 皐月懐石コース(6月1日まで)

旬のいさき、蛤などを使い、初夏を感じていただけるよう盛りつけにも工夫しています。冷酒つきで5250円です。(板長：薬科浩)

先付：枝豆腐 鰻芥子とえ お椀：蛤真丈、水前寺のり 生もの：刺身三点盛り 焼物：いさき焼きひたし 煮物：焼き茄子雲丹寄せ 揚物：矢羽根蓮根帆立いこみ 食事：焼きおにぎり茶漬け 水菓子：西瓜

洋  
食

## オマール海老ディナーコース(6月29日まで)

カナダ産の生のオマール海老をゆで、ニンニクとオリーブオイルのソースでめしあがっていただきます。これに前菜、スープ、サラダ、デザート、コーヒー、パンがついて4410円です。(シェフ：黒須修一)

## 8月の部屋代は半額です

8月の貸室料金は一律5割引です。社内の暑気払いや旧友との同窓会には、宴会特別プランがお得です。15人ほどのご利用で、部屋代を含め会費は5000円でおつりがきます。まだ空いている日もありますので、早めにご予約ください。詳細は貸室予約担当へ(03-3503-2724)。

## アラスカの料理人によるヘルシークッキング本

レストランアラスカが監修した料理本『おいしく食べて治す糖尿病』『おいしく食べて治す腎臓病』が出版されました(日東書院 各1050円)。黒須シェフ、薬科板長らが考案したカロリー控えめのごちそうレシピが紹介されています。寄贈していただきましたので、ラウンジの図書コーナーで閲覧できます。

## クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン(9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン(10階)	経 理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3503-2724	
受 付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	URLアドレス
3503-2722	http://www.jnpc.or.jp

## 会報委員会

委員長=住田良能

委員=池谷 忍 石田昭彦 伊藤三郎 仙石伸也  
高橋利行 西田善夫 松本侑子

連絡=長谷川和子 本庄五月

(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

## 5月24日に記念講演と会員懇親会

すでにご案内のように、5月24日(木)午後4時半から、作家・塩野七生さんを迎え、10階ホールで総会記念講演会が開催されます。「『ローマ人の物語』を書き終えて」の演題で短くお話しいただいた後、出席者の質問に答えていただきます。引き続き、5時半からは9階宴会場で会員懇親会も行われます。準備の都合がありますので、出席を希望される方は事前にお申し込みください。出席申し込み FAX03-3503-7271 TEL03-3503-2722 電子メール kaiken@jnpc.or.jp

## カードスタンドに会員証を

レストランを利用される際は、テーブルの上のカードスタンドに会員証を置くようご協力願います。

会員でない記者も社員証や日本記者クラブ取材証を提示していただければ、クラブ施設を利用できます。和食(9階)洋食(10階)レストランともランチは午後2時半まで(ラストオーダー2時)オープンしていますので、夕刊締切後の遅い昼食をとるのに有効に使っていただければと思います。ご案内ください。

## &lt;訃報&gt;

植田新也産経新聞社顧問(元代表取締役社長 77歳)が4月20日、すい臓癌のため死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

## &lt;会員現況&gt;法人会員 146社 基本会員 807人

個人会員 1,639人 法人・個人賛助会員 72社 180人  
特別賛助会員 75人 名誉・功労会員 9人

計 218社 2710人

HP <http://www.jnpc.or.jp/>

## 「会見速記録」：4月の新規掲載

- 高原明生東京大学教授「中国外交—中米関係を中心に」(2007. 1. 23)
- ミハイル・サーカシビリ・グルジア大統領記者会見(2007. 3. 9)
- 阿南惟茂前駐中国大使「『社会主義市場経済』の光と影」(2007. 3. 16)
- ロバート・ホワイティング米ジャーナリスト「IS AMERICA DESTROYING JAPAN'S NATIONAL PASTIME?」(2007. 3. 28)
- スラユット・チュラノン・タイ首相「日タイ関係—永続的で強い連携の新時代に向けて」(和・英)(2007. 4. 3)

## 今後の行事予定(5/2現在)

- 5. 19(土) 14:00~15:35(10階ホール)  
試写会「陸に上った軍艦」
- 5. 30(水) 15:00~16:30(10階ホール)  
研究会「文明史として見た科学報道50年」  
村上陽一郎国際基督教大学教授
- 5. 31(木) 15:00~16:30(宴会場)  
研究会「中国」⑥ 党大会後の中国  
佐々木智弘アジア経済研究所研究員

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテープでお知らせしています。

## 写真回廊

撮影 松本 敏之 (朝日新聞東京本社  
編集局写真センター)



共同会見を終えた日米両首脳 (キャンプデービッド 4. 27)

### 日米サミット今昔

あの時のキッシンジャー米大統領補佐官の厳しい眼光が忘れられない。視線の先には、角さんで知られた田中角栄首相(故人)。首相就任後間もない1972年8月末、ニクソン米大統領とのハワイ会談に乗り込んだ時のことである。

その前年、キ補佐官はまだ米国との国交がなかった中国を密かに訪ね、米大統領の訪中を決めて世界をアッとさせた。このニクソン・シヨックで佐藤政権が倒れ、後継の角さんが間髪入れず「日中国交回復」を決断して早期訪中を決める。

それに先立つ日米首脳会談に備え同補佐官が来日、「対中接近では米国のペースにも配慮を」と注文を付けた。その補佐官に、角さんは「お前さんが悪いんだ!」——この迫真の秘話を、後に外務省筋から聞き、ハワイで見せた補佐官の怒りが納得できたのである。

そんな厳しい環境下でひやひやさせられたハワイ会談も、表向きは両国の緊密さを強調して終わったものだ。さてそれから30余年。先日開かれた安倍・ブッシュ会談も例によって「揺るぎない同盟」を誇示する握手で締められた。とはいえ、国益の衝突をめぐる「厳秘」のやりとりもあってこそその首脳会談である。その辺はどうだったのでしょうか、安倍さん。

(伊藤 三郎)